清流通信　四万十川物語

公益財団法人　四万十川財団
TEL　0880-29-0200　Mail　office@shimanto.or.jp
FAX　0880-29-0201　URL http://www.shimanto.or.jp

SHIMANTOGAWA MONOGATARI
2020.8.25
Vol.286

四万十川財団設立 20 周年記念！首長インタビュー 第 3 弾　梼原町長　吉田　尚人氏

今月の清流通信は四万十川流域首長インタビュー第 3 弾ということで、四万十川最大の支流、梼原(ゆすはら)川を擁する梼原町の吉田尚人町長にお話を伺いました！

■ まず最初に、町長が子どもの頃の川での思い出を聞かせてください。

吉田町長：私は梼原の中でも四万川(しまがわ)という地域の出身で、四万川地区を流れる四万川川で小さい頃はよく遊んでいました。田んぼのあぜ道を通って、川岸の竹藪を抜けて河原へ下りて、泳ぐと言っても飛び込んで泳いだら簡単に向こう岸につくような小さな川だったのですが、友達と一緒に泳いだり魚を捕ったりしたことが面白かったという思い出があります。石をひっくり返すと、私たちはセムシとかゴムシと呼んでいましたが、カゲロウやトビケラの幼虫がいて、それを餌にして釣りの真似事をしたりしました。釣りよりカナツキ（銛）で突くほうが好きだったので、カナツキを持って毎日のように川に行っていました。一番の思い出と言えば小学生の時に初めてアユをカナツキで突いたことです。岩にへばりつくようにしていたアユを突いたのですが、あの感動は今でも忘れられません。その頃は、今ほど川もきれいではなかったように思いますが、ゴス (アカザ) やドンコ、ゴリといった、いろんな種類の魚が川を泳いでいました。今はあまり見られなくなって数も少なくなってきているように思います。特にゴスは本当に見なくなりました。当時は学校が終わるやいなや友達と一緒に川へ行き、夏休みの間はお昼ご飯を食べたらすぐ川に行き、夕立の頃に帰ってくるという感じでした。釣りであれば一年中できますが、あまり釣りをしなかったのもあって、川で遊んだ思い出は夏場が多いです。その他だと、私の叔父が梼原の松原地区にいたのですが、お盆などに愛媛への里帰りの途中、大きなウナギを持って立ち寄っていました。腕よりも大きいウナギが箱の中にうようよいたことが目に焼き付いて離れません。四万川の叔父は今でも魚釣りの名人で、つけ針を浸けておいてよくウナギを捕ったりしています。

■ 先ほど生き物が少なくなったというお話もありましたが、この 20 年間で梼原川・四万川川のどんなところが変化したと思いますか。

吉田町長：まず川が浅くなり、淵が少なくなりました。昔はとにかく至る所に淵があって、淵をずっと上っていきながら魚を捕ったりしたものですが、「ここはすごい淵だったのに、全然淵じゃなくなったなぁ」という所がいくつもあります。淵がなくなった一因としては、山から土砂が流れてくるということが挙げられると思います。大雨で流された土砂が川に入って深い所に溜まった影響で、全体的に淵が埋まり、河床が上がってきたんだと思います。昔は岩から飛び込んで遊んでいたような場所も、とても飛び込めるような状態ではないくらい、川

が浅くなっている所が多くなってしまいました。また、川鵜やサギが増えたことで、放流したアユを川鵜が捕食してしまう事例も少なからずあるので、川鵜からアユを守る対策をしていかなければいけないと考えています。今四万川ではよくサギが見られますが、昔はサギはいませんでした。最初見た頃は、むしろかっこいい鳥だなと思って見てたんですけどね。魚族保護会の方々からも、川鵜やサギへの対策として取り組んでみたい具体的な案が出てきています。実際に川鵜やサギの対策に取り組むにはやり方によっては河川管理者の許可を得なければならないので、一緒に取り組んでいきたいと考えています。他に以前から変化したところと言えば、川の水質が良くなっている点です。合併処理浄化槽や公共下水道、農業集落排水など下水処理が整備・普及したことによって、家庭排水でも例えば台所の排水がそのまま川に流れるということがなくなったので、汚れた水やゴミが川に流れることも減り、透明度は上がっていると思います。梼原町は四万十川の源流域であり、上流からきれいにしなければ下流はきれいにならないという意識が町全体にあるので、川を大切にしようという意識が強いです。やはり先祖代々大切にしてきた四万十川なので、きれいな四万十川を後世に残していかなければならないと考えています。

■ これまで水質改善の取り組みなどをされてきたとのことですが、これからどんな取り組みを行っていきたいと考えていますか。

清流保全の取り組みを今まで以上に前進させていきたいと考えています。いろんな生物が育まれるような川になってほしい。昔と比べて減ってしまった魚たちがまた暮らせるような川になってほしい。川鵜やサギの被害が出ないような取り組みをしていきたい。四万十川を美しく保つため、今後より積極的に改善に取り組んでいきます。

↑カナツキでいろんな魚を捕っていたという吉田町長
川で遊んだ思い出をたくさん聞かせていただきました

■ 最後になりますが、梼原町として梼原川・四万川川をどんなふうに活かしていきたいと考えていますか。

川を美しく保つことは梼原町の魅力となり、結果としてこの町に住む人が増えることに繋がると考えています。住む人を増やすためには現実問題として雇用の場も必要になります。そのため、様々な産業を興して町から人が出ていかないようにし、一度町から離れた人も戻ってこれるような仕組みを作っていきたいと考えています。そして、梼原に住んでくれた人が家庭を持ち、次の世代の子どもたちが産まれ、その子どもたちが川で楽しく遊び、川遊びの経験を常に次の世代へ次の世代へと受け継いでいけるような川であってほしいと思います。川で楽しみ、川で学ぶ、いろんなことを自然から学んでいけるような場としてきれいな川であってほしい。人が近づけるような川であってほしい。私たちが子どもの頃毎日のように川で遊んでいたように、子どもたちにも川で遊んでほしい。人と川の距離が身近にある暮らしがこれからも続けられるよう、梼原川・四万川川をきれいに残し、環境保全はもちろんのこと、梼原町へ住む一つのきっかけ作りとしても活かしていきます。

四万十川の源流域にあたり、急峻な山々に囲まれた緑豊かな“雲の上の町”梼原町。町面積の 90％以上を森林が占め、そんな豊かな山々から供給される豊富な栄養分を含んだ清らかな水が、町内を流れる３本の清流、梼原川、四万川川、北川川に流れ込み、やがてその水は四万十川へと続きます。そんな梼原町では、下水処理整備による川の水質改善のほか、年に 2 回、町内一斉で河川の清掃を行うなど、町全体で川の保全活動に取り組んでいます。町長からもあったように、「清流四万十川を守っていくためにも、源流域である梼原の川をきれいにしておかなければいけない」という強い意識を町民全体が持ち、その想いのもと生活しているからこそ、清流が保たれているのだと思います。上流・中流・下流、自治体は違えど同じ一つの川が流れる流域、四万十川を守りたいという気持ちは同じです。今回の取材を通して改めてそれを感じましたし、これからも流域全体で四万十川の保全に取り組んでいかなければいけないと感じました。

↑四万川川